

エッセイ 中東奮闘記—湾岸50年、オイルマンの軌跡

第六回 アラブ人と混じって

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

6-1 アブダビのUDECOへ出向 - レイプ未遂事件

「ハルディア警察からです。つないでよいですか」とレバノン人秘書のライラの訝しげな声。「つないで」と答えて、電話に出た。

1977年10月、私は再びアブダビで働くことになった。勤務先は、新しい海上油田開発を目指して日本のジャパン石油開発株式会社（JODCO）とアブダビ国営石油会社（ADNOC）が合弁で設立したウムアダルク石油開発会社（UDECO）。人事、総務、渉外、経理などの事務部門を統括する事務部長という役職の仕事であった。

それより5ヶ月前の5月に、私はJODCOの西田常務に丸の内ホテルに呼び出され、UDECOへの出向の可否を打診された。「所長は、技術畑の人で単身赴任。奥さん同伴で、所長代理ができる人を探している。出向で来てもらえないか」ということであった。私は「日本のためになるなら、行きましょう」と答えた。

8月末になって、「遠藤君、こういう話があるが、君行くか」と丸善石油での上司の増野常務から打診があった。シナリオ通り、「行きます！」と答えてのアブダビ赴任であった。

「今日4時ですか。お伺いします」と言っけて電話を切り、訝しむライラには、「心配しなくていいよ。ちょっと、ワイフのことでね」と伝えた。

こんな電話が入ったのは、妻がアブダビで巻き込まれた事件のせいであった。

10月に先に単身でUDECOに赴任していた私は、翌年1月に娘たちをロンドン近郊の立教英国学院に入学させるべく日本からイギリスに直行した妻とロンドンで合流し、娘たちを学校の寮に送り届けてから、2人でアブダビに戻った。

それから数日後の昼前、妻から「すぐに家に帰ってきて」と会社に電話があった。「具合が悪い？」と訊いたが、妻は「とにかく帰ってきて」と言う。「どうしたんだろう」と思いながら、自宅へ急いで帰った。

アブダビで妻と住んだ家は、海岸近くの高級住宅地のハルディア地区にある敷地300坪、建坪80坪を超える邸宅であった。

玄関を入ると、控えの間にはスリッパやサンダル、財布、紙幣や小銭が散らばり、階段やその踊り場にまで広がっていた。青ざめている妻に訳を聞いてみると、朝にペンキ塗り風の少年が、「この家のペンキ塗り替えの時に、ペンキ缶を二階に置き忘れたので、取りにきました」と言って訪ねてきたという。

ペンキ缶を受け取った後も、少年は帰ろうとしない。「マダム、私はペンキ屋は嫌いです。この家で働かせてください」とせがみ始めたというのである。妻が「私の一存では決められない。今日のところは帰って」と言ったが、帰らない。

先に住んだベイルートではパレスチナ難民たちがよく金を貰いに来ており、こういう人たちの扱いに慣れていた妻は、「金をやって帰らせる以外にない。財布は二階のベッドルーム」と思い付いて、「一寸待って」と言って二階に上がって行きながら「しまった！」と思ったが、後の祭り。

少年が後を追って上って来て、階段を降りようとした妻を踊り場のところで捉まえ、挑みかかった。身体を抑えつけられ、首を絞められるやらで、このままでは殺されると思った妻が、「あなた、私をいくつだと思っているの。あなたぐらいの子供がいるのよ。こんなことをしちゃ駄目！」と諭すと、少年は急におとなしくなって、「マダム、許して下さい。お願いですから、警察には言わないで下さい」と哀願し、出て行ったとのことだった。

妻は首を絞められ、首筋にはネクレスがこすれてできたみみずばれの傷跡が幾筋もついていた。思いもかけない出来事だった。

夕方、2人で自宅近くのハルディア警察署を訪ねた。事件を報告すると、アブダビ人の署長が広い部屋に案内した。正面に署長と背広姿のシリア人が座り、シリア人が私と妻に英語で質問し、それを左側に座った書記がアラビア語の調書に作り上げていった。私たちにとって、警察で調書を取られるのはまったくの初体験。しかも、取られた調書はアラビア語。

「それからどうしました？」とシリア人。「犯人はそこでマダムを捉まえたのですね。それから？」、「女性が細かく答えられると思うか。もう十分」と抵抗したが、長い調書を取られて署を出た頃には、外がすっかり暗くなっていた。

その後、毎日のように「ハルディア警察です。遠藤さんですか」と会社に電話がかかってくるようになった。「夕方4時に署まで来られませんか」、「OK、行きます」というような次第であった。

夕方署に行くと、署長同席で署員が分厚いアルバムをめくる。そこにはたくさんの顔写真が貼ってあった。ページをめくっては、「この中に犯人がいますか？」と訊ねながら、妻の顔を注視している。妻にとっては外国人の顔はどれもが同じに見え、「この男かな？」と一瞬でも目をとめた写真はちゃんとチェックされていた。

翌日、「遠藤さんですか。夕方5時に来ていただけますか」という電話。

署に行くと、昨日の顔写真で「これかな？」と妻が一瞬考えた連中を隣の部屋に集めていた。そして、椅子にすわっている私と妻の前に、一人ずつ引き立ててきて、「この男ですか」「違いますか」と首実検をさせた。怖い体験であった。ふてくされた人相の悪い連中の実物が、目の前に立つのである。

「ハルディア警察です。遠藤さん？」「今日は4時？伺います」と署に行くと、ペンキだらけの男たちを大勢隣の部屋に待機させていた。そして、一人ずつ私と妻の前に立たせて

首実験をさせた。犯人は少年と報告したのだが、警察はペンキ塗りに従事している老いも若きもすべて引き立ててきたようであった。

ある日中、妻が一人の家に、警察が少年のペンキ塗りの少年を引き立ててきた。妻が「犯人はもっと背が高い。この人ではない」と言っているのに、検分のために家の中に引き込もうとする。少年が玄関で嫌がっていると、いきなり往復ビンタを喰わせ引きずるようにして家に連れ込む手荒さだったという。

警察からの呼び出しも減り、「迷路入りだな」と諦めかけていた数ヶ月後のある日、「ハルディア警察です。遠藤さんですか」と懐かしい電話を秘書のライラが私につないだ。「5時ですね。では後ほど」と電話を切り私と妻が署を訪ねたのは、夏も盛りの頃のことであった。

署員が「この男ではないですか」と一人の少年を私たちの前に引き立ててきた。男を見た途端に妻の身体が小刻みに震え始め、「この人です」と言うなり、私の手を強く握り締めてきた。「この男だそうだと私が答えると、署長が妻に「間違いないですね」と念を押して、署員に男を連れて行くよう指示した。

その後、署員が「こちらに」と言うので私と妻がついて行くと、別の部屋の奥の長テーブルの前に5人ほどの男が座っているのが見えた。「あの中に犯人はいますか。どの男ですか」と妻に確認を求めた。妻が「います。左から2番目の人です」と答えると、それで犯人は確定した。ダブルチェックをしたのであった。

犯人は、18歳のパキスタン人の少年。捕まった経緯を訊いてみると、前日の真夜中にカナダ人の主人が何気なく二階から外を見たら家の中を覗いている不審な男がいたので、「これはおかしい」と警察に通報して捕まったのだという。

それから裁判となった。裁判の法廷は、普通のアパート・ビルの中の一室。その部屋の中の向かい合った奥側のテーブルに、スーダン人の裁判官と進行役のアブダビ人係官と書記が座り、入り口側には私と妻が着席した。その左横に、犯人の少年と引き立て役の男が立っていた。それだけであった。裁判は、人生初体験。しかもアラブの国で。

通訳を連れずに妻と2人だけの参加だったので、裁判は英語で行われた。

少年は手を前に縛られ、いまにも泣き出さんばかりの表情を浮かべていた。裁判官が「罪を認めるか」と訊ねると、「認めません。そんなことはしていません」と必死に抗弁した。凶々しいと思ったが、少年にしてみれば「罪を認めれば、どんな目に遭うかもしれない」という不安や「認めれば父母や弟妹たちへの仕送りが絶たれる」という切実な思いもあったのだろう。進行係がさらに詰問すると、さすがに少年も罪を認め、泣き出してしまった。

私は立ち上がって、「彼はまだ若い。これから将来もある。事件も未遂に終わっている。寛大な措置をお願いしたい」と裁判官に申し出たが、「100叩きと4ヶ月の監獄、その後に国外追放」という刑が申し渡された。少年は大声で泣きながら引き立てられて行った。悲しい後姿であった。

6-2 アブダビでの自動車運転 - 3勝3敗3引き分け

海岸沿いのコーニッシュ通りを左折して2、300メートル行ったところで、セドリックが右側に停車して待っていた。私の車が近づくと、その車はまた私の車の前をゆっくりと走り始めた。私はハンドルを固く握り締めて後を追った。目指すは、町外れのブティーン地区にある交通警察署。

その小1時間前、私は海岸沿いの通りを西に向かって、トヨタクレシーダを走らせていた。突然、「ドーン！」という音、追突だ。車から降りると、ぶつけた相手は30歳代のヨルダン人技師。私がアブダビに赴任してすぐのことであった。

修理代を支払ってもらわなければならない。そのために必要な事故証明を貰うために、われわれは交通警察に向かっていた。

私が車の運転免許証を取得したのは、アブダビ赴任のわずか1週間前。車に乗ったのは、教習所での42時間だけ。こんな状態だから、運転が下手なのは当たり前。車をぶつけられたといっても、私が運転未熟でモタモタ走っていたのは、間違いない。警察に着くまでの2キロの間にヨルダン人技師は何回も道路脇に車を止めて、私の車の到着を待っている。私にとっては、懸命の汗だけの運転であった。

それから2年間のアブダビ勤務の間に、私はこの事故も含めて9回の交通事故を体験した。成績は、3勝3敗3引き分けの5分の星であった。3勝とは相手のせいでの事故。3敗とは、私のせいでの事故で、「申し訳ありませんでした」と謝ったケース。3引き分けとは、車の故障によるケースであった。私は、ヨルダン青年のお陰で赴任早々にまずは1勝を上げた。

私が妻と春休みでアブダビに戻ってきた娘たちを乗せて、第2回U.A.日本人野球大会応援のためにドバイに向かって2600CCのトヨタクラウンの新車を走らせていたのは、1979年3月のことであった。120キロのスピード制限のアブダビ・ドバイ間のハイウェイのドライブは快適で、車内はルンルン気分には溢れていた。

毎日の車ででの出勤で、私の運転の腕前も少しは上達していた。アブダビからドバイまでは160キロ。道のりの半分辺りを過ぎたころ、5500CCの濃紺のベンツがずっと私の車を追い越していった。運転席のアラビア服の現地のハンサムボーイと隣に座った欧米系のブロンド美人の姿が、ちらっと見えた。

「成金の道楽息子か。よし、あのベンツを追い抜いてやろう」と私はスピードを140キロに上げた。ベンツが意識したのかスピードを上げて、私の車を抜き返した。私は、妻たちの制止を振り切って、スピードを148キロに上げた。件のベンツは一気に加速して私の車を追い越し、はるか彼方に走り去ってしまった。

そこから3、40キロ走ったところで、車の前部から突然白い煙がシューと立ち昇った。「何だろう？」と思う間もなく、車は道路を外れて「ガタ、ガタ、ガタッ」と数メートル砂漠に突っ込んで止まった。何が起こったのか、さっぱり分からない。いずれにしても、

車が動かなくなってしまった。

「どこが悪いのだろう」と降りて車のあちらこちらを見たが、機械オンチの私には見当もつかない。そのうちに、人々が集まってきた。シャツ姿のインド人、背広姿のレバノン人やシリア人、アラビア服の現地の人々。

いろいろなことを言う。「潤滑油がないよ」、「ラジエーターの水がない」。背広姿のヨルダン人が「あっ、ファンのシャフトが折れている」と言う。見ると、なるほどラジエーターのファンの軸が折れていた。

彼はその後で、「これはガレージで直す以外にない。暗くなる前に、ドバイに運ぶ必要がある。車を放置しておくで、夜の内にタイヤからラジオからすべてはずされ、車は丸裸にされてしまうよ」と教えてくれて走り去った。

ドバイの野球大会の会場に行けば日本人が大勢いるし、会社の同僚たちもいる。しかし、ここは砂漠のまっ只中、連絡しようにも電話もない。ヒッチハイクで行く以外ない。道路の上に出て走ってくる車に手を振ると、何台目かにやってきたトラックが止まってくれた。「ドバイまで乗せてくれない?」、「ドバイのどこ?」、「乗ってから言う」、「どうぞ」。

かくして、私が運転手の助手席に、妻と娘たちはトラックの荷台に乗せてもらってドバイに向かった。ドバイまでは約10キロ。野球会場で会社の同僚を見つけ出し、私が会社のインド人運転手とランドローバーで事故現場に戻り、事故車をドバイの自社の資材基地に保管した。これが、最初の引き分けであった。

それは、アブダビのヒルトンホテルでの夜のパーティーに出席した時のことであった。パーティーが終わり、私は妻を隣に乗せて、家に帰るべくラウンドアバウトを左折しようとしていた。「おかしい!」と思った瞬間、「ズドーン!」。妻と車から降りてみると、車は2メートルほど歩道に突っ込み、そこにあった高さ30センチほどの石のベンチの上に腰掛けるように乗り上げている。そして、2つの前輪がクルクルと空回りしていた。

左折の時に、効きのよいパワステアリングのハンドルを多く回しすぎて、歩道に乗り上げてしまったらしかった。こちらは背広姿とパーティードレスで正装の二人、そうでなくとも物見高い人々が集まって人垣ができた。「手伝って!」と声をかけると、数人のインド人やパキスタン人が寄ってきてくれて、車を石の上から降ろしてくれた。車のエンジンが、どうしてもかからない。「明日、牽引する以外にない」と、私と妻は自宅までタクシーで帰った。

翌朝早くに会社の運転手を現場に連れて行き、動かなくなった車をワイヤーで牽引してガレージに運び込んで事なきを得たのであった。これが3敗のうちの最初の1敗であった。

これで成績は1勝1敗1引き分けの5分の星となった。

この後は、親会社のADNOCの経理部長にぶつけられての1勝、アブダビゴルフクラブでの車の故障での1引き分けとなった。

シリア人経営者とのプレイを終えた午後7時近くに、彼と別れて車に乗り込み、エンジンをかけようとするが、「カタカタ カタカタ」という音がするだけでエンジンがかからな

い。ゴルフ場はメンバーの自主運営。その日は、われわれ2人が最後のプレイヤーであった。

郊外の砂漠のゴルフ場からアブダビの町までは、10キロ近くはある。100メートルほど砂地を歩き、ヒッチハイクしようと街に通じる道路に出ると、たまたまアブダビ行きバスが来るのが見えた。

アブダビでバスに乗るのはインド人やパキスタン人などが主で、欧米人や日本人はまず乗らないが、私はバスに飛び乗った。こちらは半ズボン半袖シャツのゴルフスタイルでゴルフバッグを背負っている東洋人。車内の乗客からジロジロ見られたが、バス搭乗初体験の2引き分け目であった。

その後、街中のラウンドアバウトでの非番のアブダビ人警察官の車にぶつかったのと、日本人会の集まりが終わって車を出そうとした時に停めてあった友人のベントにぶつけて尾灯を壊してしまった2敗が加わった。

しばらくして、スーク近くの道路上で信号待ちをしていた時にアブダビ人から後ろからぶつけられて1勝を上げ、それにアブダビ・ドバイ間のハイウェイでパンクのために砂漠に突っ込みかけた1引き分けを加えて、2年間のアブダビ勤務の間に9回の事故を起こした。成績は3勝3敗3引き分けの堂々たる5分の星と、いまでも胸を張っている。

これらの事故の噂が広まっていたのか、アブダビで私の車に乗ってくれるのは妻や娘たちだけとなった。私が勤務を終えて日本に帰国する直前にたまたま私の車に乗らざるをえない羽目になったJODCOの碓井所長に、車から降りる時に「遠藤さん、車の運転が本当にうまくなりましたね」としみじみと言われた時には、恐縮した。

6-3 現地女性の来訪 - 娘への求婚

「せっかくきれいに作ったのり巻きを、握りつぶしながら食べている」と、私と妻はハンナをただただ見つめていた。当時、アブダビの女性はアバーヤとよばれる長衣で身を包み、バルカとよばれる烏天狗のような面で顔を隠していた。夫以外には顔を見せない。ハンナは、そのバルカの口の部分をヒョイと持ち上げて、手の平で握りつぶした海苔巻きを口に入れていた。

その夜のわが家への客は、母親のハンナ、長男のアブドラー、次男のアブドルクリム、その弟のハーディム、それに末弟のセイフである。ハンナはアブダビの王族出身で有力部族に嫁いできた人。私の家にはそれまでも何人ものアブダビ人男性たちが遊びにきていたが、バルカをつけた女性をわが家に迎えたのは、その時が初めてであった。

長男のアブドラーは、陸軍中尉で24歳。アブドルクリムは、警察の警部で22歳。ハーディムは、水電気省の役人。有力部族クベイシ族のエリートたちであった。推測すると、ハンナは40歳そこそこ。

その夜の正客は、13歳のセイフ。その夜、我が家の次女智子11歳をこのセイフの嫁

に貰いたいということで、母親初め兄弟たちがわが家を訪ねてきたのであった。妻とさんざん考えた挙句に、食事は日本食を出すことにした。

メインはすき焼き。アラブの人には醤油味は無理かと思ったが、ハンナはバルカを上げながら、手でつまみあげた肉やしらたきを口に運んでいる。私も現地の女性をこんな間近かに見るのは初めてであったが、その手は皺だらけ。日本では完全に老婆の手で、妻と同じぐらいの年には思えなかった。厳しい自然条件の中での生活で身体が傷むのだらうと思った。

その時に出したオードブル、刺身、鳥のから揚げ、筑前煮なども食べてくれた。息子たちはアルコールは飲まないが、セブンアップとコーラを飲むこと飲むこと。次々と空き缶が並んだ。楽しい宴であった。

アブダビ陸軍で空手を教えていた曾我がアブドッラーと親しかった縁で、私の娘たちがイギリスからアブダビに帰ってくると、アブドッラーの妹で12歳になるダビラのところに遊びに行くようになっていた。その時にセイフが次女の智子を見初めて嫁に欲しいということで、その夜一家でわが家を訪れたのだった。

「娘を嫁に欲しいというが、あなたのところは どうやって生計を立てているのか」と訊ねると、「自宅とは別にビルを1棟持っていて、貸している。ダウ船を漁師に、車をタクシー運転手に貸している。長男、次男、三男の3人が勤めに出ている。部屋数が41の新しい家を現在建設中だ」とアブドッラーの答え。

アブドッラーが、「セイフの嫁といってもいますぐではないから、婚約でもよいね、母さん」とハンナに念を押して、私の方にその旨を申し入れてきた。私の方は「娘はまだ小さいから」と断り、あとは日本のこと、アブダビのことをメインの話題にして、その夜の宴が終わったのであった。

ハンナたちが帰った後で私は妻と「ビルを持っている。ダウ船や車も貸していて、兄弟たちは働きに出ている。となると、年収は5千万円を下らない。それもこの国は税金がないから、ネット収入だ。日本に帰れば私の年収は5百万円ちょっと。1桁下だ。嫁入り先の条件としては、金銭面だけで見れば悪くはないよね」と話し合ったのだった。

私とアブドッラーたち、妻とハンナ、娘たちとダビラとの交際はその後も続いた。そして、私たちの帰国が決まった1979年夏、娘たちが休暇でイギリスから帰ってきた時に、ハンナが自分の家で送別会を開いてくれた。

彼女の家はアブダビの街はずれの現地の人たちが住んでいる一角にあり、高い塀に囲まれた典型的なアラブ人の家。立派な門を入ると、前庭がある。どこか見たような風景である。ここに数羽のにわとりが餌でもつえばんでいけば、日本の田舎の農家と同じようであった。玄関を上がって左手のマジュリス（集会室）は、広さが4、50畳ぐらいはあったろうか。板張りの上に、ペルシャ絨毯がひよひよいと無造作に置いてあった。その日の客は、私たち一家4人と例の空手の先生の曾我と会社で人事担当の横手。

当日のご馳走は、羊の丸焼き。頭も載せてあって、こちらを睨んでいる。ハンナが私に

目玉を勧めてくれる。羊の目玉は正客に振舞われるのだが、あのキョロキョロとした喉越しの味はいまでも忘れられない。あとは、手でむしった肉を私の方にポンポンと放ってくる。私たちも手でそれらを食べながら、肉の下のサフランやいろいろの香料で炊かれた米を右手で寿司のように握って食べた。

こういう場に女性が出ることはアラブではあり得ないのだが、ハンナが解放的な考え方の持ち主で、その日もバルカをつけたハンナやダビラも出てきてくれ、アブドゥラー、アブドゥルクリームらの兄弟たち、それに父親、つまりハンナの旦那も加わっての送別会となった。

6-4 ベドウィン部落訪問 - 急激な変化

アブダビ石油でプリンスと呼ばれていたベドウィン族長のモハメッドに初めて会ったのは、私がバイルートに長期出張中の1974年にアブダビ石油の事務所を訪ねた時のことだった。

彼は腕に鷹（実際は、ハヤブサ）を止まらせて、私がいた業務部の部屋にいきなり入ってきた。鷹をみるのは初めて。毛並みのよい鷹で、目隠しのフードをつけていた。その時に、鷹1頭が数十万円はすると聞いて目を丸くしたのを覚えている。

プリンスは、アブダビ内陸部のリワ砂漠育ちで根っからのベドウィン。子供のころから、故ザイド首長とよく遊んだ仲であるという。彼は、ザイド首長の推薦でアブダビ石油へのルーラーズ・リプリゼンタティブ（首長代表）を務めていたので、プリンスというあだ名がついていたが、年齢は当時60歳ぐらいであったろうか。

1976年初頭、バイルート内戦を逃れてアブダビ石油のキャンプに身を寄せていた私は、アブダビ石油の社員数人と彼の部落を訪ねることにした。これが、私にとって初めてのベドウィン部落訪問であった。

山ほどのビスケットとキャンディ類と飲み物、それにプリンス所望の毛布数枚を積み込んだ数台の乗用車でプリンスたちが乗った車の後ろについて、アブダビ市から西のリワ砂漠に向かった。アブダビ市から彼の部落までは250キロの道のりであった。

150キロほど走った所のタイヤのガソリンスタンドで、砂漠から私たちを迎えに来てくれた4台の4輪駆動車に全員乗り換えた。スタックするので、乗用車では砂漠は走れないのである。

車は小さな灌木の生えた平坦な砂地の上を走ったかと思うと、砂丘の頂へと駆け登る。そこを駆け降りて、うなり声を上げてまた次の砂丘を駆け登る。そのたびに、車体が横転しそうに傾く。すごいスリル。私が乗った車の運転手は、途中まで迎えに来てくれていた13歳のベドウィンの学童。巧みな運転だ。毎日通学する道だと聞いた。急勾配を駆け上がった砂丘の頂から見渡すと、砂漠の果てに夕日が沈もうとしていた。赤い、大きな太陽だ。われわれが乗る日本製の四輪駆動車の「TOYOTA」の文字が、夕日に映えた。

やがて日が沈み、薄暗くなった砂丘を下ると、掘立て小屋がいくつも見えてきた。3, 40戸ほどはあったろうか、それが目的地のベドウィン部落であった。車が着くと、部落の男たちが総出でわれわれを迎えてくれた。すぐに、「アッサラームアライクム（ごきげんよう＝あなたたちの上に平安がありますように）」「ワ・アライクムッ・サラーム＝ごきげんよう＝そして、あなたたちの上にも平安がありますように」の挨拶。私たちは部落から5～60メートル離れてポツンと立っていた宿舎の小屋に案内された。女性がいる部落に、私たちが近づかないようにとの警戒からであったのだろう。

小屋の下は、まったくの砂地。部落の男たちは、小屋の外の砂の上に毛布を何枚か敷いた。それが今夜の宴会場。数歩離れて、病気のラクダが1頭、柵につながれていた。宴会場の照明は、2台のランドローバーのヘッドライト。私たちと部落の男たちは、車座になって敷物の上に座った。アラビアではいつもスタッグパーティー(stag party)、男性のみの集い。

やがて、部落の若者たちが今夜のご馳走を運んできた。直径1メートルほどの金属の皿いっぱい盛りに盛られたご飯と、その上に載せられた羊の丸焼き。頭部は毛のついたまま、こちらに目をむいている。その夜のご馳走を手づかみで食べながら、ベドウィンたちと私たちとの間で、日本とアラブの暮らしぶり、子供の教育のこと、セックス談義、さらには日本とアラブの唄比べとなった。

「子供が学校に行きたがらず、困っている。なにか良い方法はないか」という相談。「俺はデザートとラクダのミルクを飲んでいるから、夜は絶対に強い」とベドウィン諸氏、「こちらオロナミンCドリンク！」と言っても迫力がなかった。歌が始まった。恋歌だという。といっても、動物が唸るような歌で、恋の感情は日本人の私にはまったく伝わらない。「浪花節って、アラビアからきたのか」とも思えるほどの唸りだった。

車が停めてある方の空が、赤く染められ明るい。砂丘がシルエット状に浮かんで見える。この辺りはブハサ油田に近い。あの砂丘の向こうには、油田の火が一面に燃えていたのだった。

夜の砂漠は、満天の星空。月はすでに中天にかかり、星も移動している。その動きの早いのにビックリする。夜の砂漠では、自然の偉大さ、悠久さ、それに比べて人間の小ささをいやというほど思い知らされた。

夜半になってパーティーがお開きになった後、私たちは小屋に引き揚げて砂の上に毛布を敷いて寝ることになったが、砂が動くのでなかなか寝付かれない。プリンスや村の長老たちは部落に戻り、若者たちの何人かはわれわれの小屋の外の砂地に穴を掘って眠りについた。

翌朝起き出して、若者の傍らにラクダがうずくまっているのを見て驚いた。よくラクダに押しつぶされなかったものだ。寝ている間に数百キロのラクダに乗りかかられたら、一巻の終わりである。私たちが起き出したのは、朝6時ごろであっただろうか。プリンス始め長老たちはすでに砂漠に火を焚き、アラビックコーヒーを沸かしていた。燃料はラクダ

の糞。彼らに「サバーヘル・ハイル (おはよう)」と言って、まずはコーヒーをいただいた。ふと見ると、5, 6メートル先にヤカンを側において若者がうずくまっている。アラビア服だから、下半身は見えない。朝の生理現象のようである。終わったら、ヤカンの水で左手を使ってピチャピチャとお尻を洗えば朝の行事は終わりであった。

ズボンを履いているわれわれは大変だった。ズボンを下ろせば、下半身が丸見え。私は人目を避けるべく、砂丘を登った。底を降る。底はすり鉢の底みたいな所で上に360度視界が開けている。誰かがすり鉢の縁に登ってくれば、丸見えである。少しでも人の目を避けるために、さらに砂丘をもう1つ上がって下がったすり鉢状の底のところにしゃがみこむ。砂漠でズボンは不便。使ったのは、持ち合わせた紙。ヤカンの水の方がずっと清潔であった。

朝食には、ラクダのミルクが振舞われた。絞ったばかりで、泡だっていた。やや青臭かったが、幾口か飲んだ。朝食後に、プリンスが自分の小屋に私たちを案内してくれる。他人が近づくの警戒しているベドウィン部落、小屋に引き入れるなどは通常考えられないが、「入れ！」と言った。

小屋は、木切れを集めて作った掘立て小屋。薄暗い内部にはベッド、タンスなどの生活用具が備わっていた。「お客は砂の上に寝かせて、自分たちはベッドに寝ているのか」とやや腹立たしかった。見ると、人がいる。女性だ！ プリンスが3人目の妻として、エジプトから買ってきた新妻であった。18歳。私たちを見て、バルカの下で顔を赤らめた初々しさが印象的であった。

UDECOで働くようになって2年目の1979年の夏のある日、私は3年ぶりに再びプリンスの部落を訪ねることになった。夕日に映える砂丘群を乗り越えるスリリングなドライブ、満天の星の下での砂漠のベドウィンたちとの楽しい語らい、羊の丸焼きのご馳走、砂の上に毛布を敷いただけの宿泊、朝焼けに浮かぶラクダのシルエット、ラクダのミルクとデーツの朝食を久しぶりに楽しめるとあって、私は興奮気味だった。

アラビア語の通訳1名を交えた男性7名と妻を加えた総勢8名は、アブダビまで迎えに来てくれたプリンスの息子を道案内に、3台の乗用車を連ねて出発した。途中四輪駆動車に乗り換える筈が一向にその気配がない。訊いてみると彼の家まで乗用車で入れるという。「おかしいな」と思いながら、着いたところは、マデйна・ザーイドから約10キロ入った地点で、掘っ建て小屋とは似ても似つかぬ1戸建てのヴィラが立ち並んでいた。ザーイド首長からの贈り物で、年初に部落ごと砂漠からここに引っ越して来たのだと言う。真新しいエアコン付きのマジュリスもあれば水洗トイレも完備。ベドウィンたちの住まいは様変わり、町の暮らしと少しも変わらないものになっていた。

夜の食事はスーパーで買ってきたチキンバスケットに、ビニール袋に入ったアラビックパンと果物。飲み物は魔法瓶に入ったアラビックコーヒー。食事も都会と変わらないものになっていた。砂漠での羊の丸焼きの期待は完全にはずれてしまい、ガッカリ。私たちは満天の星の下ではなく、マジュリスの蛍光灯の下にいた。

懐かしい部落の人たちが三々五々集まってきてくれて、「アッサラームアライクム」「ワ・アライクムツ・サラーム」の挨拶が続いた。かつて独身で砂を掘って寝ていた若者たちも、所帯持ちのいいおじさんになっていた。

「なにしているの?」「なにもしていない。俺の仕事は、アブダビに行って政府からお金を貰うことさ」と言う。みんな前より覇気がなくなったような気がした。飼っているラクダは、イラン人に世話をさせていると言う。私が最初に訪ねた時に朝ラクダを引き連れて草を求めて砂漠へ出ていた若者たちは、その仕事まで放棄していた。

夜まだ9時だというのに、プリンスが「エンドー、早く寝ろ」ときかんにせき立てる。「まだみんなとゆっくりしたいのに失礼なヤツだな」と思いながら移った部屋はエアコン付きの20帖あまりの広さで、冷蔵庫もあり、真ん中にマットレスが2枚敷いてあった。この部屋は普段は第2夫人が住んでいるが、今夜は私と妻のために空けてくれたのとのことだった。部屋の隅には、女性が顔を隠すための付けるバルカがポツンと置いてあった。

やがて、彼が最愛の第3夫人を連れて部屋にやってきた。彼女とは、砂漠の中で会って以来3年ぶりの再会であった。まだ22歳、あの時バルカの下で顔をパッと赤らめた初々しさがまだ残っていた。モハメッドは65歳ぐらいにはなっていただろうが、まだ3人の妻を持っていた。このエジプト美人は彼の自慢の妻。私と妻に「寝ろ、寝ろ」とせき立てたのは、彼女を私たちに会わせたかったのだとその時気が付いた。あるいは、彼が若いエジプト人妻に「エンドーたちに会わせろ!」とせがまれたのか。子供のころの写真を見せてくれたりして、ベイルートやカイロの話が出来て彼女も楽しそうであった。

帰り際にプリンスがマットレスのゴミを手で払い落とし、毛布をパタパタと振ってゴミを振るい落とししてから、匂い消しのスプレーをいやというほど吹き付けて寝床を整えてくれた。それから身体に付けるよう妻と私の両手に香水を溢れんばかりに注いで、「トゥスビフ アラーハイル (おやすみ)」と言ってエジプト美人と部屋を出て行った。

朝方「エンドー!」「エンドー!」と枕元で呼ぶ声がある。見ると、プリンスが私と妻が寝ている部屋に入ってきていた。プライバシーもなにもあったものではない。「起きろ。起きろ」、「お茶が入っている。飲め!」とアラビックコーヒーを差し出している。時計を見ると、まだ朝の5時。ラクダのミルクは出ずじまい。

アラブのホスピタリティの精神以外は何もかも変わってしまった、ベドウィン部落への訪問であった。ベドウィンたちの生活は、この数年で急速に変わっていた。

6-5 砂漠での日本人野球大会 - 予想外の結果

1977年暮れに、アブダビで第1回UAE日本人野球大会が開かれた。中東の地で日本人の野球大会が行われたのは、これが初めてであったろう。オーガナイザーは、当時アブダビ陸軍で空手を教えていたJODCOの岩井とアブダビ石油渉外部長の吉田、丸善石油で1年後輩の畏友たちであった。

大会の仕組みは、アブダビとドバイ地区のチームが各地区で予選を行い、両地区の代表各2チームで優勝を争うというものであった。アブダビ地区では、アブダビ石油、合同石油、商社連合、当時アブダビ空港を建設中だった竹中工務店、大使館チーム、それにわがJODCOの6チームが結成された。

当時UDECO事務部長の私は、メンバーの勧誘、ユニフォームや用具の取り揃えなどを指揮し、初代野球部長を仰せつかった。チームは藤田所長を総監督とし、実戦面の指揮をとる監督には岩井が当ることになり、3人でJODCOチームを運営して行くこととなった。

チーム名は、「アメリカの石油の本場のヒューストンに本拠地を置くアメリカンフットボールに、ヒューストン・オイラーズというチームがある。これにあやかろう」という藤田所長の発案で、「オイラーズ」と命名された。東京に作成を依頼していたユニフォームも、なんとか試合前にアブダビに到着した。色はブルー、デザインがなかなか洒落ていた。

なんとか確保した12, 3人のわがチームは素人軍団。高校以上の野球部に在籍した者は、皆無であった。少年野球や会社に入ってから草野球の経験者、中には野球をしたことのない者もいた。

チーム結成後、会社が終わった3時過ぎから、アブダビ郊外のグラウンドでの練習を開始した。グラウンドといっても砂漠の一角、下が固い土漠状の所を選んだ。砂漠で大の男たちがキャッチボールをしたり、ノックを受けたりしていると、アブダビの子供たちが怪訝そうな顔で集まってきた。

当時アブダビでスポーツをする大人や子供は、ほぼいないという状況であった。今や人気スポーツのサッカーも誰もやらなかったし、自転車に乗る者すらいなかった。ましてや、野球などまったく知らない。それで恐る恐る近寄ってきていた。

アブダビ地区での強豪は、アブダビ石油の「テラーズ」と竹中工務店チームであった。しかし、試合が始まってみると、思いもかけないJODCOチームの福島投手の活躍で、アブダビ石油の「テラーズ」とわが「オイラーズ」がアブダビ地区の代表に勝ち残った。福島投手は身長が160センチ、体重も50キロ前半、たちまち「小さな大投手」というあだ名がついた。

アブダビ地区の決勝戦では、「オイラーズ」は「テラーズ」に大敗を喫し、残念ながら準優勝に終わった。

かくして、「オイラーズ」も加えたアブダビ地区代表2チームとドバイ地区代表2チームが第1回UAE日本人野球大会優勝をかけて戦うことになった。場所は、アブダビ近郊の土漠の一角。わが「オイラーズ」は午前中にドバイの第1代表と対戦、大方の予想をひっくり返して5対3で逆転勝ち。アブダビ第1代表の「テラーズ」も順当に勝ち進み、午後2時からアブダビのチーム同士が優勝をかけて対戦することになった。

「テラーズ」は、凄いチームであった。ピッチャーは世界ソフトボール選手権大会に出場した全日本チームのエースの森下、キャッチャーは、1972年に甲子園で優勝した津

久見高校のメンバーの深江。セカンドは早大軟式野球部出身、サードは立大野球部に籍を置いたことがある揚戸、ショートは東京六大学リーグでならした東大野球部出身の片桐。レフトは深江とチームメートだった小野田、センターは高校野球部出身の鈴木と錚々たるメンバーが揃っている。JODCOチームから見れば、プロの人たちであった。

従って、決勝戦は大学生チームと中学生チームが対戦するようなもので、アブダビ地区の決勝戦では、「オイラーズ」は「テラーズ」に大敗している。午前中の準決勝が終わったところで、「お宅が相手なら、もう勝ったようなもの。ビールでも飲んで、昼寝でもして来よう」と言いながら、「テラーズ」の面々はグラウンドから引き揚げていった。すでに祝勝会の準備もしており、UAE日本人会会長であるアブダビ石油の百瀬駐在代表も、自社の優勝を想定した閉会の挨拶も準備しているらしかった。

午後2時、決勝戦が始まった。こちらは、小さな大投手の福島が頼り。バッターには「球を選べ。バットを短く持って球に食らいつけ」との指示を与えて試合に臨んだ。あとは野次。「テラーズじゃなくて、エラーズ、エラーズ」。TERRORS から「T」をとると、ERRORS になる。

試合は、序盤「テラーズ」が得点を重ねてリード。わが「オイラーズ」は予想外に善戦。ボールを良く見てフォアボールで出塁し、バットを短く持つとけっこうボールに当り、ボールも飛んだ。途中で「オイラーズ」が11対9で逆転をしてしまった。

「テラーズ」も反撃を試みたが、焦りが出てバッターはバットを長く持って振りまわす。豪打で鳴るレフト小野田、センター鈴木の本塁打が空を切る。

かくして、11対9のスコアのまま試合終了。奇蹟が起こり、「オイラーズ」が勝ってしまったのであった。一方がバットを振りまわし、一方がバットを短く持って必死にボールに食いつくと、前者は高校生のレベルに落ち、後者が高校生のレベルに上がり、この結果になったのだった。

試合後の表彰式。百瀬日本人会会長の挨拶は、心なしかギコチなかった。次に優勝カップの授与。日本人会会長杯、日本大使杯。それに、外務大臣杯、石原慎太郎環境庁長官杯、王貞治杯まであった。わが「オイラーズ」監督の岩井が休暇で日本に帰った時に、集めたカップであった。日本から1万キロ近く離れた砂漠の中での野球大会、胸にジーンとくるものがあつた。

私の方は、祝勝会の準備をなにもしていなかった。夕食まで時間もない。総務課長の清田に、コックにできるだけのご馳走を作らせておくように、社員の家族にも祝勝会に参加を呼びかけるように指示してから、私は海辺でのカニ捕りにまわった。

メンバーは、私と村上技術部長、それに若い地質技術者の島村の3人。車で野球場から寮にとって返し、冷蔵庫から牛肉の塊を取り出して、網かごを持って海岸沿いのコーニッシュ通りに直行した。辺りは暗くなりかけていた。岸壁から肉塊をいれた網かごを水中に下ろす。見ると、カニが肉の匂いにつられてか、そろりそろりと網かごの中に入り始めた。カニがかごの中の肉塊にかみついたところを見計らって、かごを引き上げれば一丁上がり。

1時間もしないうちに、40匹ほど捕れた。これで十分と引き揚げた時には、夜のとばりが下りて、アブダビの街に灯りが灯り始めていた。あのカニ捕りは、私にとってはいまでも忘れることができない。近代的なビルが立ち並ぶいまのアブダビでは到底想像ができない往時のコーニッシュ通りでの出来事であった。

6-6 UDECO就業規則 - 日本人の特殊性に直面

私がアブダビに赴任した時にUDECOの設立は決まっていたが、細部の詰めがなされておらず、JODCO（ジャパン石油開発株式会社）がインテリム・オペレーター（暫定操業会社）として活動を始めたばかりの時であった。事務所の開設や人の採用、銀行口座の開設、資機材の購入も終えて、海上での試掘も順調に進み始めていた。

2つの株主が難交渉の末にUDECOを正式に設立したのは、私が赴任してから1年以上経った頃であった。株式シェアは、ADNOC（アブダビ国営石油会社）50%対JODCO50%。アラビア語の株券の発行も無事終えた。当時の従業員数は日本人が30人強、現地スタッフが60名強で総勢100人近くに膨れ上がっていて、会社の新事務所への移転も終えた。

会社の従業員規則の策定にも、着手した。私たち日本人が相当の勉強をしても間に合わない。そこで、私は、アテネに本社を置いて湾岸地域で活躍していたアラブ人のコンサルタント会社を使った。その会社を作る原案を基に、コンサルタントと私と新任の総務課長の谷口とスタッフの横手が加わって討議を重ねながら、最終案を作成した。

UDECOはアラブの会社で、終身雇用もなければ年功序列もない。社有車は、所長車と会社で運搬用に使うバンの2台だけ。所長以外は、すべて自分で車を運転して会社来ると規定した。

接待費もなかった。株主総会、取締役会などの後のパーティー費用だけを会議費として計上した。日本からの客との食事代とか、「日本人会」への費用支出とか、そんなものは認められない。接待文化に慣れた者にとっては、不自由であった。

他にも、難しい事項がいくつかあった。

第一は、独身寮。UDECOで働く日本人は30人余り、うち家族帯同者はわずかに6家族に過ぎなかった。あとはすべて単身赴任者と独身者。私としては、JODCOがインテリム・オペレーターの時に設置した独身寮をUDECOに引き継がせようとするのだが、親会社であるADNOCが首を縦に振らない。

「UDECOとしては、家族持ちには3LDKのフラット、単身者と独身者には2DKのフラットの支給だけでよい。会社で独身寮を作り、コックを雇って食事を提供する必要はない」というのがADNOCの言い分であった。

私が必要をいくら主張してもADNOCを支配していたアルジェリア人たちの態度は固く、交渉は難航した。そこで、ADNOC関連の他の石油会社の実情を調べてみる

ことにした。1960年初からアブダビの陸上で石油を生産しているADCOには独身寮はなかった。これより1年早くアブダビの海上で生産を開始したADMAにはあったが、例外的なものだった。

UDECOとほぼ同時期にフランスのCFPとADNOCの合併で設立されたZADCOは、当時の従業員数は400名だったが、独身及び単身者は8人だけ。この人たちのためにコックと給仕を雇用し、調理用具の準備やこれらの管理までを会社でやるのは考えていないということだった。

当時、日本以外に単身赴任を当たり前に行っている西欧の国などなかった。彼らの場合、夫婦は常に一体であり、夫だけが何年も家庭から離れ、金だけを送るような状況であれば確実に離婚であっただろう。外国人の場合は、子供を本国の寄宿舎においても、夫婦は揃って赴任するので、独身寮は必要なかったのであった。

ADNOCの言い分も一理はある。といっても、こちらも引き下がる訳にはいかなかった。2DKのフラットを各人に与え「あとは勝手に」ということにすると、たちまち会社の業務に支障がでる。独身寮を認めて貰わないと困るのだった。

ADNOC窓口のアデル次長には、「日本の事情を理解して欲しい」、「社員が家族帯同をした時の会社の負担額と単身赴任した時の負担額を比較すると、単身者が多いUDECOは金がかからない会社である」と力説して、なんとか独身寮を認めて貰ったのであった。

その後も、日本人の特殊性にいろいろと悩まされた。

休暇制度。中東の暑さはボクシングのボディブローのように効いてくる。従って、中東では、心身ともにリフレッシュして効率よく働いて貰う趣旨で、何ヶ月か働いたら、リフレッシュのための休暇が与えられるのが通例である。UDECOでも、「家族帯同者には年に1回60日間、単身者には年に2回各30日間の休暇を与え、各々アブダビと日本間の往復航空券のチケット代を支給する」と規定した。

ところがである。外国人はきちんと休暇をとるのだが、日本人は「仕事に支障が出る」と言って休暇をとらない者が出てきた。働きバチの日本人にとっては、休むことは悪、とより常に働いていないと不安のようであった。

「多忙で休暇がとれないが、往復の航空券代は現金で支給して欲しい」と要求する者が出てくる。また、単身者の何人かに怒鳴り込まれることもあった。「家族帯同者は、休暇になると家族でヨーロッパ旅行などを楽しんでいる。単身者は日本へ帰るだけ。家族帯同者の方が単身者に比べて会社としての費用負担が多い。単身者にも、家族の航空代を支給せよ」というのであった。

通勤手当。日本では、都会のサラリーマンは会社から定期券の支給を受けて電車通勤し、地方では不便な現場や工場へは会社が用意するバスなどで通勤している。UDECOの就業規則では、その人のランクに従った「カー・アロウワンス（通勤手当）」を現金で支給するだけで、あとは各人が各人の選択で会社に通勤すればよいというシステムであった。

「個人で車を買うのか」、「保険料は会社負担か」、「帰任時に車は会社が買い上げてくれ

のか」などと迫ってくる。「そんなことは各人で処理すべき。現地人スタッフでそんなことを言う者は誰もいない。日本人だけだ」と突っぱねた。結局は、「任意保険料と売却損の一部を親会社であるジャパン石油に負担して貰うことで収めた。

日本人は、会社への依存度が強かった。事業所が僻地にある鉱山会社出身者に、とくに強かった。僻地ゆえに会社がいろいろと面倒をみていたのであろう。

さらに、UDECOへの出向社員がオールジャパン的に日本の代表的な銀行、石油開発会社、石油会社などから選ばれていて、各人の会社文化が多様であり、また選抜されてきたとの各人のエリート意識が高かったこともこれらの一因だったかもしれない。

忌引休暇。日本では、2親等以内の親族が亡くなった時には、7日間の忌引休暇が与えられ、帰省交通費も出張扱いで支給される。コンサルタントが作った原案には、この規定がなかった。これを入れるように指示しようと思ったが、ここはイスラムの国である。

イスラムでは、人が死んでも葬式はごく簡単。その日のうちに遺体を布で包んで、モスクでの礼拝の後に土に埋める。その後弔問を受けるのは3日間だけ。遺族には、40日間の服喪期間はあるが、葬儀は3日間で終了である。墓参も行われない。これでは、7日間もの忌引休暇は要らない。

日本人スタッフの身内に不幸があった場合に、休みも与えられないことになる。仏教徒の日本人はこれではすまない。といって、UDECOの就業規則にこれを入れる訳にはいかない。そこで、「所長が特別に認めた場合は、この限りではない」という規定を挿入して収めた記憶がある。

6-7 アブダビから帰国 - 混迷するイラン情勢

私のアブダビ勤務中に、シャールの下で比較的安定していたと見られていたイランの政治情勢が流動化していた。

事の始まりは、1978年1月7日に現地紙に掲載されたホメイニー師への中傷記事であった。それには、「宗教界は共産主義と結びついている」、「ホメイニー師はインド人の宗教家」、「イギリスと関係がある」、「若い頃恋愛詩を作った」などが書かれていた。

これに抗議をする学生が主体の約1500人の群衆がコムの寺院で政府への抗議集会を開き、群衆が会場を出てデモに移ろうとした時に官憲が発砲し、数人の死者と多数の負傷者が出た。

その喪が明けた40日後の2月18日から19日に、イラン全土でコムの犠牲者を悼む集会が行われた。その中でタブリーズでの集会が暴動に発展し、官憲との衝突で多数の死者が出た。これに対し反政府デモが40日サイクルで3月、5月、7月と断続的に起こり、イランは騒然とした状況に陥って行った。

8月19日にはアバダンの映画館が放火され、約360人が焼死する事件が起こり9月8日にシャールは戒厳令を布告したが、これに反するデモが起こり、テヘランでは軍隊の発

砲により多数の死者がでた。10月20日頃から石油産業の労働者のストライキが始まり、原油の生産量が減少した。11月5日、首都テヘラン市内はデモ隊によって占領され、銀行、映画館、公共建物などが破壊され、テヘラン大学内のシャーの銅像も引き倒された。

シャーは内閣の改造等でこれに対応したが、事態を収拾できなかった。12月26日にはついに石油の輸出も停止した。その後の内閣改造も無駄となり、1979年1月6日、シャーは、反皇帝派のバクチアルを首相に立てて、王妃とともにイランの土を入れた小箱を抱えてイランを脱出した。

このような事態に陥った背景にはなにがあったのだろうか。

安定と見えた中で、シャーの権力主義的な支配、秘密警察などを駆使した抑圧的な政治に対して国民の不満のマグマがたまっていたこと。シャーが提唱した白色革命による農地改革等の成果が上がらなかったこと。石油収入の急増に伴って進められた度を越えた経済発展政策が破綻したことなどが挙げられる。結果として、電力・労働力・食料品等の払底、港湾等のインフラのパンク、猛烈なインフレ、貧富の拡大、汚職の蔓延などが進行していたのであった。

シャーへの批判で1963年に国外追放となったホメイニー師は、トルコを經由して、シーア派の初代イマーム・アリーの墓廟がある聖地のイラク南部のナジャフに長い間居住していた。そこからシャーへの批判を続けていたホメイニー師は、シャーからサダーム・フセインへの要請によって1978年10月にイラクから国外退去となり、パリ郊外に居を移していた。

1979年2月1日、ホメイニー師は300万人ともいわれたイラン大衆が歓迎する中、パリからエール・フランスのチャーター機でテヘランに帰国した。ホメイニー師76歳のことであった。

そして、2月5日に新首相を任命。2月11日にシャーが任命していた首相が辞任することによって成立後わずか半世紀のパフラヴィー朝が倒れ、ホメイニーが政権を握った。いわゆるイラン革命である。

ホメイニーは、シーア派「十二イマーム派」の教義に忠実な「ベラヤテ・ファギーフ（法学者による統治）」を掲げ、厳格なイスラムの日常を復活させ、イスラム法を適用し、宗教色の強い政治を展開した。4月1日には、「イラン・イスラム共和国」が樹立された。

この間、1978年11月に前月比200万バレル/日減の350万バレル/日にまで減少していたイランの原油生産は、12月に完全にストップし、この状態は翌年3月6日まで続いた。世界の10分の1強を占めていたイランの石油生産が完全にストップしたのである。第2次石油危機の発生である。

これによって、原油のスポット価格が高騰し、OPECは同年1月に年内に10%の値上げを決定したが、4月には繰り上げ値上げとしてアラビアン・ライトは14,54ドル/バレルとなり、7月には18ドル/バレルに引き上げた。

こんな情勢の中、私はUDECOでの2年間の任期を終えて、アブダビから日本に帰国

した。

主な参考文献：

「ホメイニーからビン・ラーディンへ」（小山茂樹、第三書館、2011年）